幼稚園教諭・保育者養成系大学における虫嫌いを克服させる授業の試み
― メルヘンと科学の絵本および実物の観察がもたらす「蜘蛛嫌い」への効果 ―

清 水 京 子[1] ・ 中 松　 豊[2]

（[1]皇學館大学非常勤講師 ・ [2]皇學館大学教育学部）

要旨：虫嫌いの子どもの増加が報告され，保護者にも同様の傾向が見られる．幼児期における自然との触れ合いの重要性に鑑み，一つの切り口として，幼稚園教諭および保育者を目指す学生の虫嫌い緩和にある一定のアプローチをおこなった．

蜘蛛に焦点を当て，学生たちをメルヘンの絵本を読む群と科学の絵本及び図鑑を読む群に分けた．二つの群に実施したアンケートを集約，比較した結果，蜘蛛への印象改善効果と実物の蜘蛛に興味をもつ効果は両者ともに見られたが，メルヘン絵本は蜘蛛への印象改善が勝り，科学絵本及び図鑑は実物の蜘蛛に興味をもつ効果が勝った．メルヘン絵本，科学絵本及び図鑑ともに実物への橋渡し役として各々の役割をもち，有効であることが示唆された．

生物学ゼミの協力を得て，実物の蜘蛛を観察した．解説を聞き，質問や言葉のやり取りをするうちに，蜘蛛を取りまく輪が少しずつ大きくなり，蜘蛛嫌いの学生群の65.6％が実物の蜘蛛に興味をもった，あるいはどちらかといえば興味をもったという結果は興味深い．実物のもつ効果と共に，傍らに一歩先を歩く人が居ることで安心感と勇気が醸し出され，虫の世界への扉を開ける力となる可能性も見えた．

キーワード：虫嫌い・絵本・改善・保育士・幼稚園教諭

1　はじめに（問題と目的）

文部科学省（2008）は，体験活動事例集－体験のススメ－［平成17，18年度豊かな体験活動推進事業より］の中で体験活動の教育的意義として，以下の効果をもたらすと述べている．１現実の世界や生活などへの興味・関心，意欲の向上，２問題発見や問題解決能力の育成，３思考や理解の基盤づくり，４教科等の「知」の総合化と実践化，５自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得，６社会性や共に生きる力の育成，７豊かな人間性や価値観の形成，８基礎的な体力や心身の健康の保持増進．その実践例の中でも自然に関わる体験活動の例は多く紹介されており，その重要性が伺える．

幼稚園教育要領ではねらいおよび内容の５領域の中で，「身近な環境との関わり（環境）」を取り上げ（文部科学省，2008），保育所保育指針においても，保育の目標６領域の中で「生命，自然及び社会の事象についての興味や関心を育て，それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと」とあり（厚生労働省，2008），幼児期の教育の中で環境教育を取り上げ，幼児教育期における教育の柱としている．

このように環境教育を前面に推し進めているにもかかわらず，現実は，科学技術立国日本において理科離れをくい止めることができていない（長沼，2015）．この大きな問題を克服するためには，幼児期および児童期における自然へのアプローチが重要だと考えられる（中井，2000）．自然体験をする上で，最もヒトと遭遇する頻度が高い動物は昆虫である．なぜならこの地球上で最も種類数および個体数の多い生物だからである．昆虫や無脊椎動物（虫）に対する意識は幼児期に高まっているが，年齢を経るにしたがってそれが低下し，小学校高学年になると嫌悪感を持つ児童まで生じてくる（藤田，2007）．

一方でこの時期に子供達を指導する幼稚園教諭および保育士を目指す学生の虫に対する嫌悪感は高い（野尻ら，2009）．木村と野崎（2016）は保育者および教員養成課程に在籍する女子学生に，虫についてのアンケートを行ったところ，約８割が「虫が嫌い」と答えたと報告している．

前田（2009）は子供の生物に対する好き嫌いの感情の成立には父母の影響が

あることを示唆している．幼児は少なからず，親だけではなく保育士の影響も受けていると考えられるので，子供の虫嫌いもしくは自然に対する活動意欲に何らかの影響を及ぼしている可能性がある．そこで，本研究では，蜘蛛に焦点を当て，虫に対して抵抗感が高いであろう幼稚園教諭，保育士を志望する学生に対して，蜘蛛を題材とした絵本と実物の観察を組み合わせる授業を行ったところ，ある一定の成果が出たのでここに報告する．

2　方　　法

平成28年度幼児教育コース２年生32名に蜘蛛に係わるメルヘン絵本を，同39名に科学絵本及び図鑑を読ませた後，実物の蜘蛛を観察し，アンケートを取った．

1）授業の流れ

使用する絵本を最前列の机に出しておき，各机に３人ずつ着席するように，板書により指示しておいた．

①導入(10分)

下記の二つの事例をあげ，大人が怖がれば子どもも怖がること，怖がる保育者が多くなると子どもの体験活動の幅が狭まることを話した．

・ヘビを追いかけ捕獲する５歳児クラスの事例

・園庭の木に登ったヘビに，ピアニカを吹くA児の事例

②教師が『ヘレン，ようこそどうぶつえんへ』(キッズメイト)を，学生に読み聞かせた．

③学生が３人一組で絵本を読み進めた．(50分)

学生達の読み方や文字量などにより，１冊に要する時間差が生まれる．空白の時間が生まれないように絵本を多めに準備した（資料１）．

④教師が『クモははらぺこ』(大日本図書)のあとがきを読んだ．その後絵本を回収した（５分）(資料２)．

⑤中松と生物学ゼミの学生による，実物の蜘蛛との触れ合いと解説を聞き，質疑応答をした．(25分)

⑥アンケートの提出について伝えた．

2）アンケート

アンケートは，ａ．あなたは『クモ』に対してどんな印象を持っていましたか？，ｂ．『クモ』の絵本を読んで，クモへの感じ方や認識が改善されましたか？，ｃ．実物の『クモ』を観察することで．クモの生態に興味をもちましたか？，ｄ．虫嫌いの子どもや保護者が増えつつあります．保育者としてどのような保育指導ができると考えますか？の４項目において質問し，ａ，ｂ，ｃは５段階の選択で，ｂ，ｃの一部とｄは記述により回答してもらった（資料３）．

3　結　　果

1）メルヘンまたは科学の絵本及び図鑑による効果

①メルヘン絵本を読む

メルヘン絵本を読んだ学生群（メルヘン群）は32名で，そのうち好き，どちらかといえば好きを合わせると２名（3.1%），どちらかといえば嫌い，嫌いが合わせて25名（78.1%）であった（図１ａ）．絵本を読んでいたときの学生の様子は，笑顔や笑い声があり，学生同士の会話がみられた．メルヘン絵本を読み，８名（25.0%）が蜘蛛への感じ方や認識が改善され，14名（43.8%）がどちらかといえば改善された（図１ｂ）．

②科学絵本及び図鑑を読む

科学絵本及び図鑑を読んだ学生群（科学群）は39名で，そのうち好き，どちらかといえば好きを合わせると２名（5.1%），どちらかといえば嫌い，嫌いが合わせて26名（66.7%）であった（図１ａ）．絵本を読んでいたときの学生の様子は，まじめな表情で読み進み，全般に静かで，時折「へぇー，知らなかった.」等のつぶやきが聞かれた．また，科学絵本及び図鑑のクラスで極度に苦手意識をもつ学生には，比較的ソフトな絵本を読めるように配慮した．

科学絵本及び図鑑を読み，２名（5.1%）が蜘蛛への感じ方や認識が改善され，22名（56.4%）がどちらかといえば改善された（図１ｂ）．

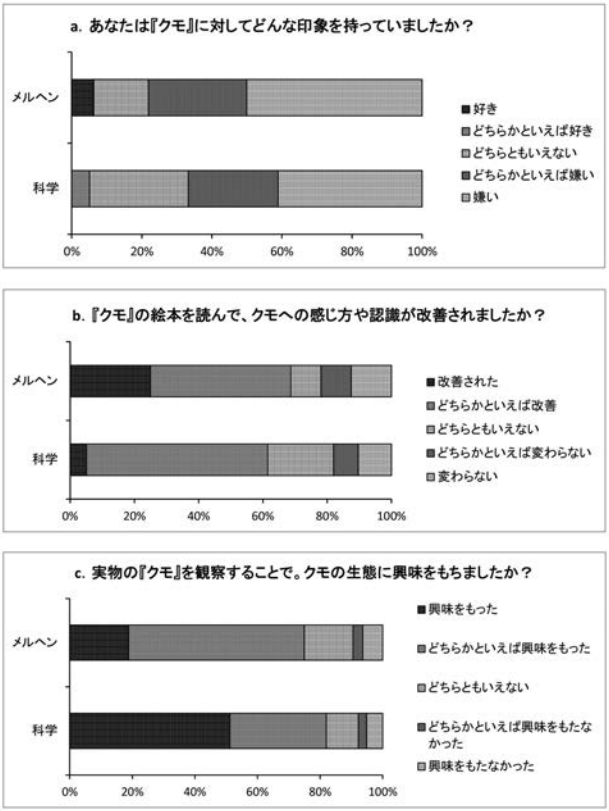

図1　メルヘン絵本を読んだ学生と科学絵本を読んだ学生のアンケート結果

2）実物の蜘蛛の観察

学生たちがランダムに４グループに分かれ，それぞれのグループに生物学ゼミ生が加わる．飼育ケースに入ったタカアシグモとジョロウグモを間近で観察しながら解説を聞き，自由に質問や会話をおこなった．

メルヘン群は，実物の蜘蛛に興味をもった６名（18.8%），どちらかといえば興味をもった18名（56.3%）であった．

また，科学群は，実物の蜘蛛に興味をもった20名（51.3%），どちらかといえば興味をもった12名（30.8%）であった(図１ｃ)．

3）蜘蛛は嫌いと回答した学生に対する絵本の効果

クモの絵本を読んで，クモへの感じ方や認識が改善されましたか．という問いに対しメルヘン群は，改善されたが16名中６名（37.5%），どちらかといえば改善されたが６名（37.5%），科学群は改善されたが16名中１名（6.3%），どちらかといえば改善されたが３名（18.8%）となった（図２b）．蜘蛛嫌いの32名のメルヘン群と科学群の改善効果を比較すると，カイ２乗検定でP＝0.0038で有意差があり，科学群に比べてメルヘン群は有意に蜘蛛嫌いを改善した．

実物のクモを観察することでクモの生態に興味をもちましたか．という問いに対しメルヘン群は，興味を持ったが16名中３名（18.8%），どちらかといえば興味を持った８名（50.0%），科学群は興味を持ったが16名中４名（25.0%），どちらかといえば興味を持ったが６名(37.5%)となり大きな差は見られなかった（図２ｃ）．

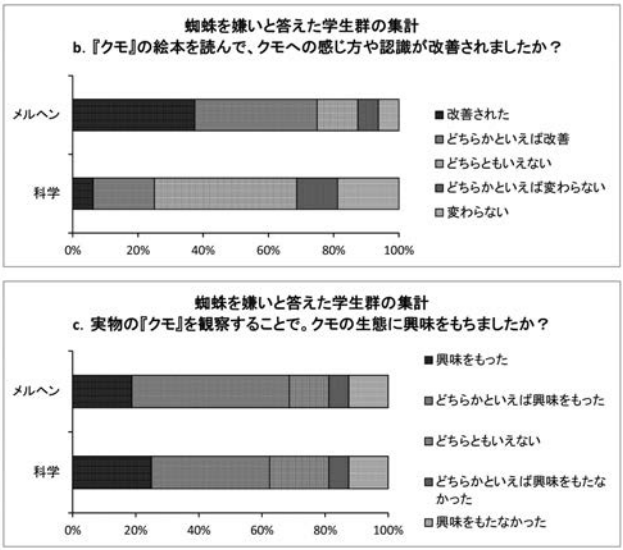

図２　図１のａで蜘蛛は嫌いと回答した学生の講義後のアンケート結果

4）アンケート自由記述の抜粋

①メルヘン群

・じっくり見ていると気持ち悪くもなく，どうやって巣をつくるのかなと色々興味を持てた．やっぱり虫も共存しているものだから，じっくり見て向き合うというのもいいものだと思った．

・こんなに近くで蜘蛛を観察するのは初めてで，足やあごをよく見てみて，蜘蛛は蜘蛛でも種類が違うとこんなに違うものかと思い，驚いた．

・餌である蛾を食べようとする様子なども見せていただきかわいそうだと思いましたが，生きるということを改めて観察して感じました．

・クモの生態を教えてもらい……，人間にとって重要な役割をもっているのだと思いました．蜘蛛にもたくさんの種類があって見ていてとても興味深くなりました．今度から蜘蛛が居てもすぐに叫んだり逃げたりせずに気持ち悪いものと思わずにいきたいと思います．

・蜘蛛を観察することで，なぜ蜘蛛は自分の作った巣にひっつかないのか等，今まで思ったこともない所に注目することができた．そして疑問に思ったことを調べるほど，蜘蛛は蜘蛛なりに工夫して生活していることが分かり，虫の世界が近づいた気がして，とても興味をもった．

・蜘蛛が居る虫かごに蛾を入れるのは，蛾がすごくかわいそうでとても見ていられなかった．心が痛かった．でも蜘蛛の生態を子どもに教えるうえでは良いと思った．

・嫌いで怖いものだと思っていた蜘蛛を初めて，あんなにも近くで見ることができた．絵本を読んで，蜘蛛の恐怖心が和らぎ，しっかり興味をもち観察することができた．

・生物学ゼミの方に蜘蛛についてお話を聞くことができ，とても興味をもちました．まず巣をつくる蜘蛛とつくらない蜘蛛が居ることに驚きました．巣をつくる蜘蛛は罠にかかった虫を食べ，巣をつくらない蜘蛛は自ら歩いて虫を捕まえて食べると聞き，そしてその2種類の蜘蛛の実物を見て，歩いて虫を探す蜘蛛の方が足の筋肉が発達しているなど，蜘蛛の生態についてより理解が深まりました．実際に見ることの大切さを感じました．……

蜘蛛について正確に理解することで蜘蛛のイメージが変わっていきました．やはり蜘蛛の悪いイメージは自分たちが勝手に植え付けたものだと思いました．

・観察をしても蜘蛛が苦手なのは変わらなかった．しかし，蜘蛛は人に害を及ぼすことは少なく，逆に害虫を食べてくれている．蜘蛛が出たからといって追い出したり殺したりしないようにしたいと思う．

・虫かごの中で動く蜘蛛を見て鳥肌が立ちましたし，やはりこわい，気持ち悪いという思いが先走ってしまいました．

②科学群

・生きた蜘蛛を見ると絵本ではわからなかった細かい部分を見られて楽しかったです．蜘蛛には目が８つあることも初めて知りました．また，蜘蛛の食べている姿を近くで見られて感動しました．食べた後，蛾の粉が口についたらしくて，口に手を当てて払っていたのを見て人間らしいなと思いました．本当に楽しくて時間がたつのが早かったです．

・実際に見るということは本当にすごいと思いました．絵本を見た後だったからこそ，ここから糸が出るのかとかあんなにきれいな蜘蛛の巣をつくるんだなとかいろいろ考えながら見ることができました．

・最初は「うわ！気持ちわる！！」と思ったけど，見ているうちにだんだんと慣れてきた．……蛾を食べている様子や目がどこにあるのか見たりして，蜘蛛ってどんな生き物なんだろうといつの間にか思っていて，興味をもっていた．

・私は，もともと昔から蜘蛛に対する苦手意識はなく，蜘蛛は虫を食べてくれる存在だと知っていました．しかし，今回の授業で蜘蛛の生態を知り，蜘蛛を実際に観察できると聞くととても興味がわきました．そして家で蜘蛛を見かけて，コガネグモだとわかり少し様子を見てしまいました．

・実際に観察をして，蜘蛛の特徴について改めて知ることができた．細かく生えた毛のようなものや，横，上にあるたくさんの目，口の位置など，それぞれどのような役割があるのか，その構成はどうなっているのかを知る

ことができた．また，ゼミ生の方や先生が言っていたように，蜘蛛が生態系に大きな影響を与えるということを知り，子ども達にこのことをしっかりと教える必要があると考え，保育者の知識が大切であることが分かった．

・蜘蛛がゴキブリやカメムシなど多くの虫を捕食することで，様々な虫の数が制限できているのだと知り，蜘蛛のイメージが大幅に変わりました．子どもたちにこのような知識を教えていく必要があると思いました．

・メスとオスの見分け方が体の大きさなのがびっくりした．糸を張って虫を食べている姿が見たかったのに見られなかったのが残念でした．

・蜘蛛が怖くないといっても，蜘蛛には毒があるというイメージが強かったため，触れるといってもいつもその部分を考えていたのですが，蜘蛛の毒で人間に害を及ぼすものはとても少なく，基本大丈夫らしく，安心しました．また，教えてくださったゼミ生の方が「蜘蛛は何もしてこない．むしろ人間を蜘蛛が避けるんだよ．」と言っていました．蜘蛛からしてみたら，私たちが巨大な怪物なのだろうなと思いました．虫と接するときは，自分を「人間」として俯瞰的に見ることが必要なのだと感じました．

・蜘蛛について知らないことだらけなのだということを実感しました．実際に見ることで，……蜘蛛も生きるためにしっかり活動していることがよく理解できました．

・あんなに蜘蛛を間近で見たことがなくて，初めの方は戸惑ってしまったが，先輩方に蜘蛛の詳しい説明などをしてもらって，前よりは興味をもてるようになりました．蜘蛛は悪い虫ではなく，害虫などを食べてくれるということを知り，殺してはいけないと感じました．そしてそれを子どもに伝えるべきと考えました．

・まず糸が作り分けられることに興味をもつと共に，蜘蛛は小さいのに賢い生物であると思った．そして蜘蛛についてもっと知りたい，見てみたいと思った．

・絵本を見た直後であったこともあり，とてもかわいく見えました．

・飼育ケースに入っていたため，全く抵抗なく蜘蛛を見ることができた．事前に本を読んで学んだことを目の前で見ることができたため，とても興味

深かった．自分で勝手に蜘蛛は害虫だと思い込んでいただけで，勝手に怖がっていただけだったと気づくことができた．

・生物学ゼミの人たちが丁寧に詳しく蜘蛛のことを教えてくだっさって，蜘蛛や虫に対してとても好感をもつことができました．……幼稚園の頃の先生は虫が大嫌いで，持って行ったりすると「キャー，あっちにやって．」と，よく言っていました．それを見て私は，虫は怖いものなんだと無意識のうちに理解していました．だから私は子どもに，虫は面白さと楽しさを与えてくれる，大切な命なんだよと教えてあげようと思います．

・前より嫌いという感情が薄まったように思いました．

・絵本の絵を見るのと実物を見るのはやはり違うと思った．また，蜘蛛は夜行性で脱皮するということや，ときには目にもとまらぬ速さで行動するなど，さまざまなことを知ることができた．しかし，蜘蛛の足に生える細い毛などを見てあまり好きになれないなと感じた．

・実際に危害がないと分かったので，積極的に観察できた．触っても大丈夫だということも教えてもらったので実際に触ることもできて，蜘蛛との距離が縮まった気がする．

・絵本などであらかじめ蜘蛛に対する嫌なイメージが取り除かれていたので，近くで見たい！と思うことができました．近くで見ると今まで気づかなかった毛がたくさんあったり，目が二つだけじゃなかったりと新しい発見がたくさんでき，とてもおもしろかったです．

・飼育ケースに入っているということもあり，怖かったけど，逃げるほど怖いと感じなかった．「気持ち悪っ．」とは思ったけど，少し興味は持てたような感じがしている．

・毒があるというイメージも触れない一つの理由なので，今回のことでこれから少しずつ触っていけたら良いなと思った．

・少し蜘蛛に慣れることができたように感じる．初めは見るだけで無理だと感じたけど，見ているうちにだんだん慣れてきて，平気だと感じた．……私たち人間にとってはプラスの存在であると感じた．

・飼育ケースに入っているかいないかは全然違い，飼育ケースの中の蜘蛛は

とても安心して見ることができました．今まで蜘蛛から逃げてしまっていましたが，こんなに近くで見ることができ，先輩方からいろんなお話を聞くことができて，蜘蛛と向き合うことができました．

・本物の蜘蛛はやはりぞわぞわしたけれど，虫を食べているところを見るのはとても興味がわきました．蜘蛛の巣はとても厄介なものだけれど，蜘蛛にとっての生きる術なのだと思うと壊せなくなりそうです．

・むやみに殺したりするのではなく，蜘蛛も食物連鎖にかかわってくるということを考えて逃がしてあげたいと思った．

・鳥肌が立っていました．でも他の子は興味津々だったので，子ども達もこんな感じなのかなと思いました．蜘蛛は怖くないと教えなければいけないのに，私が怖がっていてはいけないと思ったので，できるだけ克服しなければいけないなと思いました．

・本当に苦手が増しました．特に大きい蜘蛛は苦手なので泣きそうになりました．しかし，蜘蛛が居なければハエなどがいっぱい飛んでいると考えると，それも嫌なので，蜘蛛は触れたり見たりするには嫌ですが，必要だと思いました．

4　考　　察

今回のアンケート結果で，この授業を行う前までの蜘蛛に対する印象は，メルヘン群では「どちらかと言えば嫌い」，「嫌い」を合わせると78.1%，科学群では66.6%であった．この数値は他大学の幼稚園教諭，保育士または教員志望の学生対象の虫嫌い調査における77%（木村と野崎，2016），73%（平田と小川，2017）と比較してもほぼ同様の数値が得られた．身近に見られる昆虫，ムカデ，ダンゴムシなどの小型の無脊椎動物は虫と総称されており，蜘蛛もこの仲間に入る．したがって，対象が蜘蛛と虫の違いはあるが，今回の調査対象である本学学生は，蜘蛛に対してほぼ標準的な感覚を持っていると考えられる．

本学学生の蜘蛛に対する印象は，メルヘン群も科学群も嫌いではなくなるという効果があり，また各々に特徴がみられる．メルヘン絵本は，擬人化により蜘蛛の“気持ち”を感じたり，蜘蛛の立場に立ち，読み手と蜘蛛が同一化する

効果をもつと考えられる．したがって印象改善の効果は科学絵本に勝ると考えられる．逆に科学絵本及び図鑑は，多くの知識を得て実物に興味を向ける効果をもつと考えられ，その効果はメルヘン絵本に勝ると考えられる．メルヘン，科学絵本及び図鑑は実物への橋渡し役として各々の役割をもち，有効であることが示唆された．

また，生物ゼミの学生や中松から，人体に影響する毒をもつ蜘蛛は0.1％であり，臆病な生き物だと伝えられると学生は安心し，一人の学生はケース内のアシダカグモの足の毛を触ったり，じっと観察して写真を撮る学生もいた．情報不足から毛嫌いしたり恐れたりすることも，知ることで解消され安心するものと考えられる．また，生態系の中で蜘蛛がいなければ人間の生活に支障が出ること等を知ることで，好きにならずとも理解することができるということが，学生一人一人の観察の様子やアンケートの記述から読み取ることができる．

蜘蛛嫌いの32名のメルヘンと科学絵本の効果を比較すると，メルヘン群は改善されたとどちらかと言えば改善されたを合わせると75.0％，科学群は25.1％で，科学群に比べてメルヘン群は有意に蜘蛛嫌いを改善できた．蜘蛛嫌いに対しては，メルヘンによる印象改善の後に科学絵本及び図鑑を提供することで，興味をもつ段階へと昇華させることができる可能性が示唆された．

絵本を読んだ後に実物を観察することにより，メルヘン群は興味を持ったとどちらかというと興味を持ったを合わせると75.1％，科学群は82.1％に及んだ．実物と接する機会をもつことの重要性と，実物の効果が強く感じられた．このように幼稚園教諭，保育士志望の学生がさらに蜘蛛に興味を持ち，自分で飼育してみたり，さらには幼児に飼育させるなどの実践を施せば，「命への理解」「思いやり」「仲間関係を育てる」「子供の表情がいきいきしてくる」「責任感がつく」「自尊感情が高まる」など，幼児期の社会性の発達を促す効果は高いものと考えられる（山下と首藤，2008）．

また，本学の学生の傾向として，傍らに一歩先を歩く人が居ることで安心感と勇気が醸し出され，虫の世界への扉を開ける力となる可能性があることも付け加えておく．

参考文献

木村紗帆，野崎健太郎（2016）保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識：虫嫌いの仕組み　椙山女学園大学教育学部紀要，9，109-119.

厚生労働省.（2009）．保育所保育指針.
http: //www. mhlw. go. jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/index. html.

中井睦美.（2000）．初等教育学系大学における理科教育の問題点と地学教育の重要性：小学校で2002年施行の学習指導要領と2000年施行の教職免許法改正に関連して．地学教育と科学運動，（33），25-38.

長沼祥太郎（2015）理科離れの動向に関する一考察－実態および原因に焦点を当てて－　科学教育,39,2，114-123.

野尻裕子，今井邦枝，＆栗原泰子.（2009）．保育者養成課程学生のムシに対する好悪について．川村学園女子大学研究紀要，20(2)，17-25.

平田豊誠，小川博士（2017）幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査　佛教大学教育学部学会紀要，16，63-74.

藤田絢，川上紳一，東條文治，神野愛，片田誠，＆大門佳孝.（2007）．小学生を対象にした昆虫に関するアンケート調査と小学３年「昆虫を調べよう」における指導上の留意点に関する考察．岐阜大学教育学部研究報告．自然科学，31，57-62.

前田正紀.（2009）．幼児教育における自然体験と保育者の資質 ― 保育者養成機関における環境教育の視点から ―．仁愛女子短期大学研究紀要，41，81-88.

文部科学省.（2002）．体験活動事例集 ― 豊かな体験活動の推進のために ―．平成14年，10.

文部科学省.（2008）．幼稚園教育要領解説（Vol. 69）．フレーベル館.

山下久美，＆首藤敏元.（2008）．虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について．埼玉大学紀要（教育学部），57(2)，105-121.

（資料１）

使用した『蜘蛛』の絵本リスト

《メルヘン》

１．海のやくそく（佼成出版社）
２．おんぶかあちゃん（アリス館）
３．きやあああああああクモだ！（絵本の部屋）
４．くも（あかね書房）
５．クモおばさんのおうちやさん（あかね書房）
６．くもくもぱんやさん（岩崎書店）
７．くもさんおへんじどうしたの（偕成社）
８．くものすおやぶんとりものちょう（福音館書店）
９．くものすおやぶんほとけのさばき（福音館書店）
10. クモのつな（福音館書店）
11. くものニイド（ポプラ社）
12. くものもいち（福音館書店）
13. くろずみ小太郎旅日記（クレヨンハウス）
14. スパイダー屋敷の晩餐会（文渓堂）
15. どのあしがさき？くもとむかでのおはなし（すずき出版）
16. ヘレン，ようこそどうぶつえんへ（キッズメイト）
17. 蜘蛛の糸（偕成社）
18. 洞熊学校を卒業した三人（三起商行）
19. 紅逢黒逢（あこうくろう）の刻（とき）第２話（マガジンハウス

《科学》

１．クモははらぺこ（大日本図書）
２．こがねぐも（福音館書店）
３．トマトのひみつ（福音館書店）
４．にわさきのむし（福音館書店）
５．かけるかな？むしムシ昆虫（PHP研究所）

6．SPIDERくも（文化出版局）
7．網をはるクモ観察事典（偕成社）
8．きらわれものシリーズ　4（リブリオ出版）
9．糸でいきる虫たち（大日本図書）
10. かがくのとも2016. 8.（福音館書店）
11. かがくのとも2015. 1.（福音館書店）
12. 月刊たくさんのふしぎ2015. 3（福音館書店）
13. むしっこいちば（教育画劇）
14. ８本あしのゆかいな仲間クモ（くもん出版）
15. クモ（農文協）
16. クモ（アリス館）
17. クモのひみつ（あかね書房）
18. クモ（誠文堂新光社）
19. ずかん　むしの顔（技術評論社）
20. 昆虫（ポプラ社）
21. 今森光彦昆虫記（福音館書店）

（資料２）

『クモは　はらぺこ』（大日本図書）あとがき要約

・クモは，人間に危害を加えることはほとんどなく，逆に人間が敬遠するハエとかカを退治してくれます．ゴキブリを食べてくれるクモさえいます．

・クモは，網を張るという特技をもっていても（網を張らない種類のクモもいる），しょせんは“待ち”の姿勢であり，こうしたタイプは，自然界では，概してひもじいおもいをするのだそうです．クモは空腹に対して，とても忍耐強いといわれています．10日や20日，エサにありつけなくても，へいきで生きています．このことはクモの食生活がそれほど豊かではないことの証明でもあるのです．

・クモがたくさんいるということは，エサであるこん虫がたくさんいるということ，つまりそこの自然が豊かであるということなのです．

（資料３）

アンケート内容

学生番号〔　　〕氏名〔　　〕

a．あなたは『クモ』に対してどんな印象を持っていましたか？

・好き　　・どちらかといえば好き　　・どちらともいえない
・どちらかといえば嫌い　　・嫌い

b．『クモ』の絵本を読んで，クモへの感じ方や認識が改善されましたか？

・改善された　　・どちらかといえば改善された　・どちらともいえない
・どちらかといえば変わらない　　・変わらない

〔内容〕

〔どの本が印象に残りましたか？〕

c．実物の『クモ』を観察することで．クモの生態に興味をもちましたか？

・興味をもった　・どちらかといえば興味をもった　・どちらともいえない
・どちらかといえば興味をもたなかった　　・興味をもたなかった

〔内容〕

d．虫嫌いの子どもや保護者が増えつつあります．保育者としてどのような保育指導ができると考えますか？

Attempt of a class to overcome insect dislikes in university that trains kindergarten teachers and childminders
― Impact of reading fairy tale and science picture books and real observations on “spider’s dislike” ―

Kyoko SHIMIZU[1] and Yutaka NAKAMATSU[2]
([1]Part-time lecturer Kogakkan University, [2]Department of Education Kogakkan University)

It has been reported that children who dislike insects have increased, and similar trends are seen in parents. It is important to interact with nature in early childhood. Therefore, we conducted classes to overcome the insect dislikes of students aiming for kindergarten teachers and childminders in the future.

Focusing on the spider, we divided the students into groups to read fairy tale picture books and science picture books and pictures. Then, we compiled and compared the questionnaire conducted in the two groups. The effect of improving the impression on the spider and the effect of being interested in the real spider were seen in both groups. The fairy tale group had an effect of improving the impression on the spider, and the scientific picture book and the picture book group had the effect of being interested in the real spider. It was suggested that both the fairy tale group, the scientific picture book and the picture book group are effective for overcoming the spider haters.

In the lesson, we observed the real spider under the cooperation of biological seminars. While listening to commentary on seminar students and exchanging questions and opinions, the circle of students who surround spiders gradually grew. It is interesting that 65.6% of the students who dislike spiders are interested in real spiders or rather interested. Through the effects of real observation and advice from experts, students can feel secure and courageous, and are thought to be interested in the world of insects.

Keywords：Insect haters, Picture book, Improvement, Childminder, Kindergarten teacher